

6 逃げる徳川家康の伝説

筆 者 岡本 春一

掛川市本所の吉松に逃げる徳川家康の伝説が残っています。小夜中山の合戦に敵に追われて逃げ返って来た家康が、岩橋のたもとの茶屋の婆さんに「今敵に追われている。何処か良い隠れ場所はないか」と問うと、婆さんは早速「その林の中に隠れなさい、私が逃がしてやりますよ」と機転をきかせて追手を待った。追い掛けて来た敵は「婆さん今此処に武将が逃げて来たが何処へ逃げたか」と訪う。「ああそれなら山の方へ逃げて行ったよ」と指差した。追手は早速その方向へ追いかけて行った。家康はようやくこの難を逃れたと云う。後日茶屋の婆さんはその恩賞にあずかった。そしてこの隠れた森を「権現の森」（徳川家康を権現様と云う事から）と云います。現在は開発が進んで「権現塚」として榛葉鉄工所の敷地内に祀られています。これは今駒氏に関係する逸話として残っています。

この吉松の歴史をさかのぼって見ると、この地は元々葦や芦の草原が広く散在して、松林の点在する地であつたから「葦松」と呼ばれていた。これは当を得た伝説で、開発の進展していなかった戦国時代までは、この地一帯は葦や芦と林の点在する丘陵地帯で馬の牧場地にもなっていた。

従って牧場としては絶好の地であつた。特に戦国時代は戦乱が容赦なくこの地に及び、戦場となった事は「今川戦記」でも実証の出来る地域です。当時重要な機動力である馬の存在価値は非常に高い。戦いを有利に進めるには、即戦力となる良馬の補給は何よりも大事な事です。

今川の地盤に敵の勢力はひしひしと迫り攻防戦は相次ぎます。この攻防に今川氏の勝利を見越して牧場主の弥左衛門は、咄嗟の機転を働かせて吉松の良馬を差出した。財力にも恵まれていた弥左衛門家は、牧畜業としても豊かな資本を掛け馬の牧場地を経営する大地主でもあった。この手掛かりとなるのは、全国的に見ても珍しい「今駒」の姓が存在する事です。なぜ今駒が誕生したのか、そのルーツを探て見るとその謎が解明される様に思う。

此の地の今駒家の本屋は今駒弥左衛門家であると言われている。一説に依ると今駒家は戦国時代今川一党であつた。小夜中山の合戦に敗れて命かながら逃げ返る時、武将曰く「これ以上逃げ帰るのは忍び難い、馬一頭を与える、依って今駒を名乗るが良い、何れかの地に生を求めよ。」と、今駒の姓を賜り決別したと云います。これを記念して「今駒」を名乗るようになったと云う。依ってこの地に落付いて農民に下り家を建て農業に励んだと云う。

しかしこの説は今駒家を語る物語としては、歴史的事実からも矛盾が多い。逃げると云う事は一刻の猶予も無い。そして徒歩よりも馬で逃げの方が戦力的に見ても最も有利である。その逃げる途中に肝心の命の綱である貴重な馬を与える事は考え難い。

従って此の地は先に述べた通り、当時とすれば貴重な牧場であり、戦力として重要な馬の放牧地であつたから、戦が始まった事に依って、その戦力になる馬を牧場主が今川氏に献上した功績に依って「今、駒を献上せしその方の功績に依り、「今駒」を名乗るが良い」と牧

場主に一筆を戴いた事を記念して今駒を名乗る様になったと、倒置法によって今駒の姓を賜ったと解釈したら如何なものか。

更に時代が降って「葦松」が「吉松」に変わったのは、今駒の一件もあるが、この地にある牧場を営み、財力のあった今駒弥左衛門の働きによるものが大きかったと思われます。江戸時代に入り平和の進展と共に貨幣経済が進み、幕府の財源確保が急務となります。「享保の改革」で新田の開発が奨励されると、大地主で財力の有った今駒弥左衛門は、早速原子より流れる沢川の水を何とか葦松に引く事は出来ないだろうかと考え、測量の結果可能である事が分かり、沢川の改修と共に自分の家の前まで水道窟を掘り遂に用水路の完成を見ます。そして葦松の広い牧場地域一帯の一町歩余の新田を開発する大事業に成功します。

従って此処を弥左衛門新田と云います。この新田開発の事業に成功した事に依って、相当の恩賞にあずかったはずで。これを記念して謝恩のあかしとして、開拓地の中心地に「権現塚」を造り、権現様である徳川家康の祠を葦松の丘に建立して祀った。この新田地帯は水に恵まれ良田と化したので、地名も「葦松」から「吉松」に改められたものと思います。

この今駒家の歴史を紐どけば、俗説は一事象でなく、二つの異なった事象、即ち良馬を献上し、「今駒」の姓を賜った戦国期の功績の物語と、財力を遺憾なく発揮して新田開発に成功し、その恩賞を受けて権現塚を造って、記念の印とした二事象から出来上っているものと思います。

余聞 江戸時代末期より明治期にかけては、今駒弥左衛門家は古来よりこの土地の大地主であった事から、本所村の戸長として活躍していました。そして戸主今駒政一郎の時代に入ります。明治 22 年の町村制施行に伴っては此の地域は新しく東山口村となります。更にひと役かって出て、東山口村収入役となり、明治 32 年から助役を勤めます。妻のきんは家にあって、呉服・太物・荒物・酒・油・煙草を手広く販売していた事が、明治 35 年 1 月の静岡民友新聞、登記広告欄に地方としては珍しく掲載されています。

【権現塚】

